

LICENSED PRODUCT

KODAK GRAY SCALE



朝夷巡島記第七編一



113
939
3



939
17

松亭金水著
葛飾為齋畫

第七編全五冊

朝夷巡島記

浪華

文金堂藏梓

朝夷巡島記全傳第七編

五十五年二月

近曾稗史行于世戲墨者流最多矣就中

曲亭子者博覽強記超于眾分明古今治

亂亦能積多年功而所著幾于卷未一誤

於機粵朝夷巡島記者頗故人未發之妙

案也縱橫經緯自在而更出人意表惜哉

朝夷巡島記全傳第七編

〇四一

第六編未結其局而成黃泉之客使觀者
遺憾僕雖不及其巧遠知好戲墨之僻書肆
來請於嗣編固辭再三而猶不聽焉於是不
得已既及採筆脫稿反復叮嚀費日月且
雖勞其神只是若櫻與棘化開愛憎異也
偏慙他方之嘲所存者勸善而已矣冀四方之

看官憐微忠愛志操開卷幸甚矣

于時嘉永壬子春月於蓮池畔

茅屋閑牖

積翠陳人題并書



驟雨過餘
可丹沃婆
手
家流
人也恨
雞年
可刺

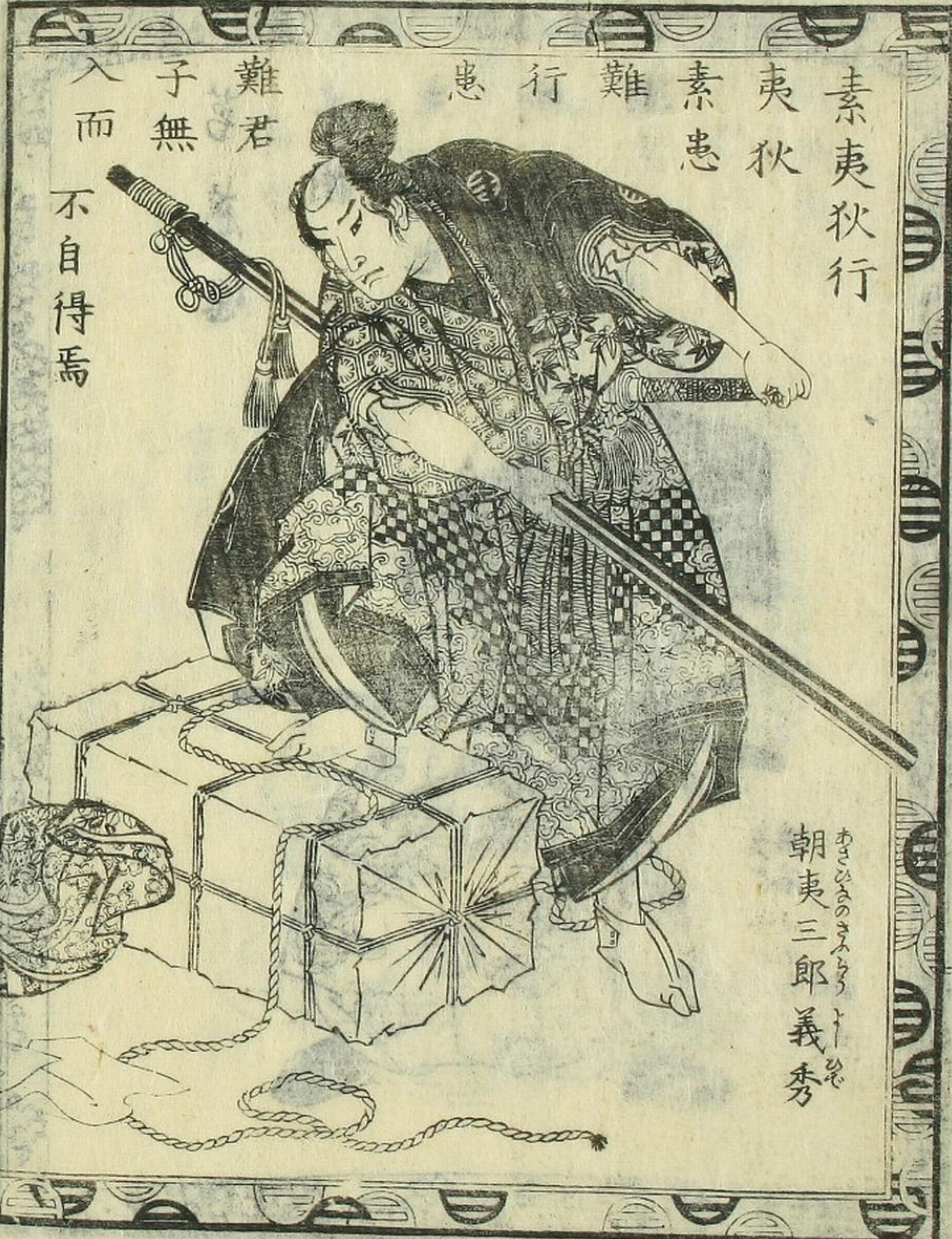


安達景盛が愛妾
笹鶴後小
柳營小召れ七側室となる

葛藤憑
大樹
生終迫
倒大
樹



澁谷小五郎
晴氏



素夷狄行

夷狄

素患

難行

患

難君

子無

入而

不自得焉

朝夷三郎義秀



夫木

みよりの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

あまの

磐城

四郎

時直

妾

磐手

月...

四

石韞玉而山
水懷珠
而川媚
暉



和田家臣
腰越獸六郎

旅店の主猛八實々
岡田冠者少一子
幼名剛若



朝夷巡島記全傳第七編總標目

卷續輯第一

募慾老婆奸
陷君澁谷棘

一續輯第二

勇士惜嬖妾別
柳營戀情曲道

卷續輯第三

誠忠諫父與祖父
密使渡口失路費

二續輯第四

英雄大罟旅客
說來歷得密書

卷續輯第五

豺狼難義漢非命死
兇賊為陷忠良士

三續輯第六

饗應酒飯畏蜂蠆
美人一曲鏢鐵心

卷續輯第七

以色操英雄
說道清庶民

四續輯第八

再揮佞者拙謀
且勝奸智舌頭

卷續輯第九

奸計弥齟語磐城酷吏
天誅直臻隱毒報

五續輯第十

義漢道路遺火厄
忠膽貫主僕再會

總計十條標目畢

朝夷巡島記全傳第七編總標目

○每編姓氏畧目有り今此編ニ新出の者其數多かりきと以て別表出せび卷と用きく自り知らん

○城戸水草の兩人太田石戸へ使あていも此編ニ復命せど朝夷既小危急ニ罹は看官遺憾ありて能いを然もとも彼兩個隈一時日の

○判五二三田鶴媛等非命小死し其後と説ごと其連ふればこ

○八編一至ア朝夷三郎鞠繪の尼小再會の話且その賊と撃の件も

○執権の奸謀つと長ト頼家と廢一實朝と立は義盛頻り小彼と疎

金水再識

朝夷巡島記全傳第七編卷之一

東都

松亭金水編輯

續輯第一

幕欲老婆奸 陷君澁谷棘

唐山の常言に日月明らんとすれと浮雲忽地とと覆ひ明君善政あんと
まれと佞臣ことと妨ぐる夫叢蘭の馨も秋風漫小吹損む況や源二位頼家
卿幕府の嫡子とて居ふが心裏の職小任ト官禄も不足ふけき竟小橋
奢小陥して日中ハ終日夜ハ終夜美女と集めて飲宴なり或ハ蹴鞠を心を委ねて
更小政子と顧む元老智臣の諫を納む只曾遊興小耽りたハ因幡前司中原廣元
入道善信和田義盛畠山重忠等の股肱の臣ハ遠きけらと月小一度も謁する
ゆる中野五郎能成以下老孝ある小人の膝下に侍らし遊宴乱行の補弼

とるま。さういふ小尼の基政子れ方の縁小あつて右大お家の時より威勢衆人小冠
たり遠江守平時政今の執権の職小あり。天下の政め大小となく意の如く為さるは
さまばその驢尾小附て或ひ此を互利を討んと欲する者へ媚を求めて主君の如
教ひ冊き奴僕のかく奔走はまこむ輩の権威を憎て自然その門下たすよびえ
中お肘を張世と憤る者ささる。奥小朝夷二郎義秀の伊豆の天城の山中おて
かの鉄盾矢藤五が幻術をのり上と掠め黄金の柱を光棍。整子碎き鞠小かけて賣
捌くと計りけと義秀豫ての案小差。その容とむて城戸武詮水草昌之と
牒ト人等既ふその群を擒つ。矢藤五をも諸俱小生捕くと思ひく。幻術とと云
を發し逃去らんとまろやふ止りどめぞ射て預さる所の痛癢小命絶し其首を
搔を区擒りつとも曳きて頓て鎌倉へ飯系志の前司廣元小託て如此と具小説へ
言をえ頼家堂て發せり。且義秀が功と愛て直小回注所へ出坐られ北條公子を

始めと廣元善信義盛以下おのく左右小列坐あり。當下義秀ハ真先小所遺し
黄金の柱を雜人小早持せ。その斫屑を籠小納め。是も雜人小負。々次小擒の
草賊三個を強く縛ち武詮と昌之小曳。うかて回注所へ出けし。羽林頼
い。高へ。亮示と笑て宜ふ。吾不喇ふ。幻術小歌掌さ。黄金の柱を
懸え。返をも慚愧小絶。是も汝汝謀策の取戻し。るの。陸奥の賊お
経任が股肱と安。矢藤五。難なく退治せむ。其功技羣なるもの。且その
黨の草賊ども三個を擒。夫が白狀の趣き。注進の書おて詳。速に牢獄
小下。追て刑戮を加。筒小汝と争ひ。今更後悔少。頻小稱賛。
ひて。自一口の太刀を賜ふ。義秀低頭平才を思ひ。厚き。従。文。分小
過ゆる。恩賜の。叙。眞加小餘。有難く。言。票。做。け。唐元善信も
義秀が。智勇の。替。君臣怡悦の。眉。開。況。和。田。義。盛。君。恩。頻

小胸小充て老の眼くろの涙をまじひ見も今も有難たすし俱を耐しまを時
 政父子は是を収て心裡小飲ひむ義秀出比へ来りて湯島沸太郎と搦めて吾
 小恥し小壺の浦を毒魚を捕へ勇ありと自ら誇り今も君の不測を恥し賊を
 敷し且捕て頗る傲慢の容をえさる君へむと其功を称しむはいつて恐は若の
 ありと思ふ渠が面魂多く小尋常の者るは竟小の家も顔くべき前を
 含むも知るべきぞ常言おのり二葉にて摘まるるは後竟小弁を用うといふこと
 ありと肚裡小思案するおろ羽林も入脚あればとよく従ひ契へ入る義秀は生
 捕を矢藤丑の首級ありとも半獄司小渡り武詮昌之の両側をむと急き宿
 所へ飯をけし營中の趣きの頓小使えと帝盛以下兄弟をき出迎へ縁て儲
 の酒般を出し武詮昌之もこの坐小仍り一休這回之功と称し且君よりの賜を
 一遠路の勞を慰むる彼此との詞のさやくるも義秀の額を挂見公よさのそ

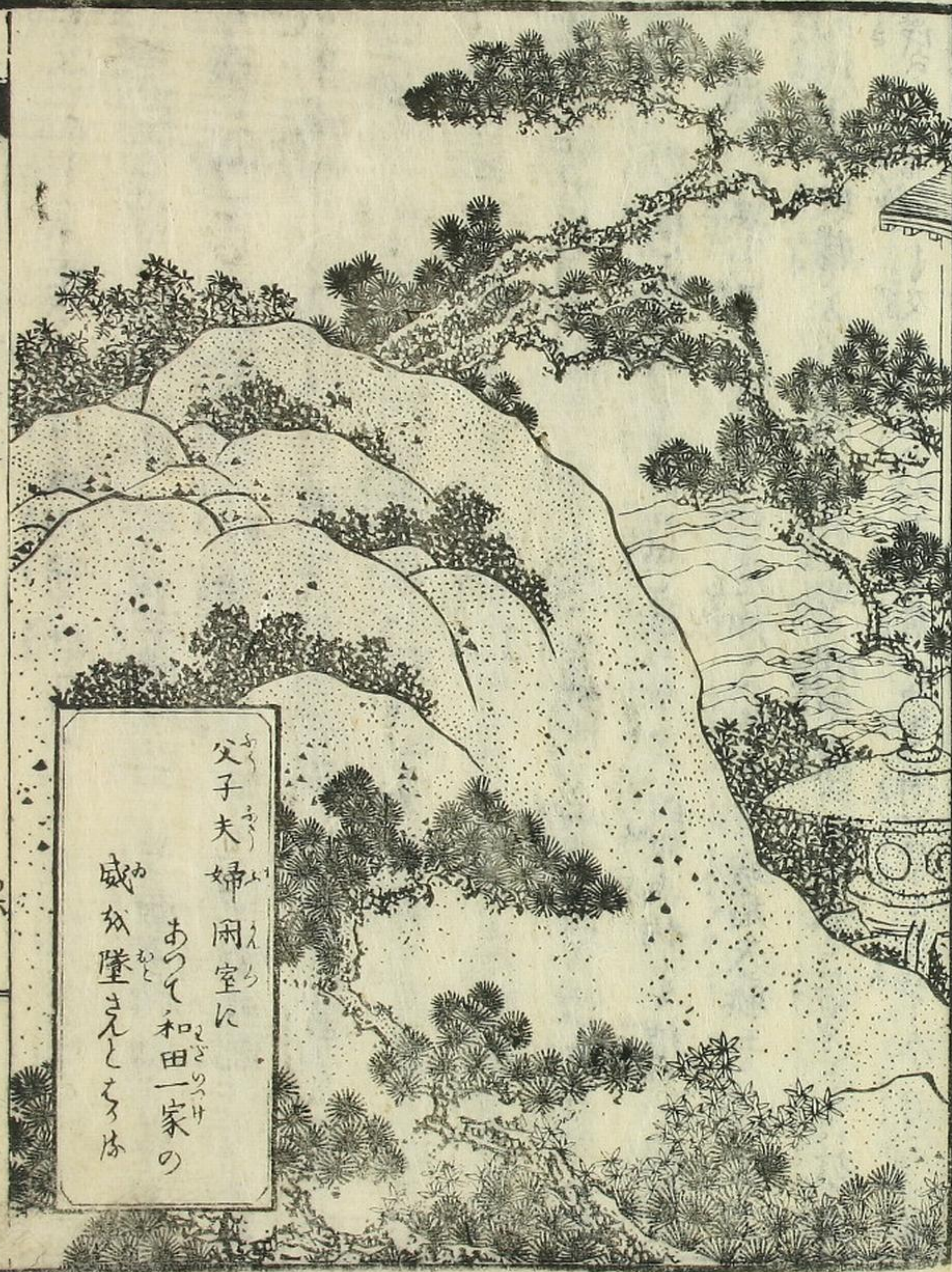
る称しひを畢竟這回のもりも君より命せられあむも一夜の物語を承り唐山
 の奮記小あるもさ思ひ出さるは必宣幻術と行る賊の所為あらんと察しふけ
 ほどこの身より望ておせし所を聊功のほは小似れどよく思へ人のむさふ
 君の非を奉はふ似て快くも信むと回答て要時歎息もその折父の義盛の營
 中より退出まつ上坐小居て左右を祝ひり這回三郎が手柄のやど今小始ぬるま
 歎賞小堪ざるに因り君の心より太刀を賜りる百力士の譽ありといどもま二
 層の禍を醸せんれと吾へ思ふ北條父子の今日の動靜心はさる多し各も
 知るごとく一家の偏執る義秀屢功をさ條にうては推貴といども憚るは
 挙動を心憎しと思ふも然とて彼家には媚溜ひ馬前の塵を拂へといふは
 あねど時勢を顧み己と曲て宜小従ふもま君子の道あり国道あれば夫のや国道
 ある夫のやと孔夫子の説多と王光祿は展風のや屈曲俗小従ふと世説ふあるは

思ひ合をたのむるを以て國を治るるに然るべきものなり世間情をわきまぬ徳道へ
陥込とあり人我の凡俗の聖賢の域をわきまぬこの惑ひと兩悟をばしんば
と説示す。三郎義秀の固より居あふ人々の教諭を會道理と感つけり。ゆ
羽林頼家卿の思ひ巡らしめし大樹の任を被ふり四海の政を執る身
ゆへ匹夫草賊の幻術も惑ひ多くの宝貨を掠らんとあまた恥辱を凌の世を
遺さしむるに渠の計らひて吾過を補ひぬる。芝坐の賞も秘邪の太刀一口の
えりと思ふ吾も恥近きもの。會莊園を充行ふ渠もささる沙汰も及ぶ。因
て先頃父義盛故右幕府の時小馬の飼料とて加恩あり相摸の国三浦の郡
矢部の莊を以て義秀の讓りしなり願文を出せ由へ廣元等より言明さるる
あつと紛してそのまふ密より開けたり。子小讓固より何の仔細あり。されど
吾等も所あはれ。這回の賞は一箇所の莊園を充行しんと勇士を愛せのいより。

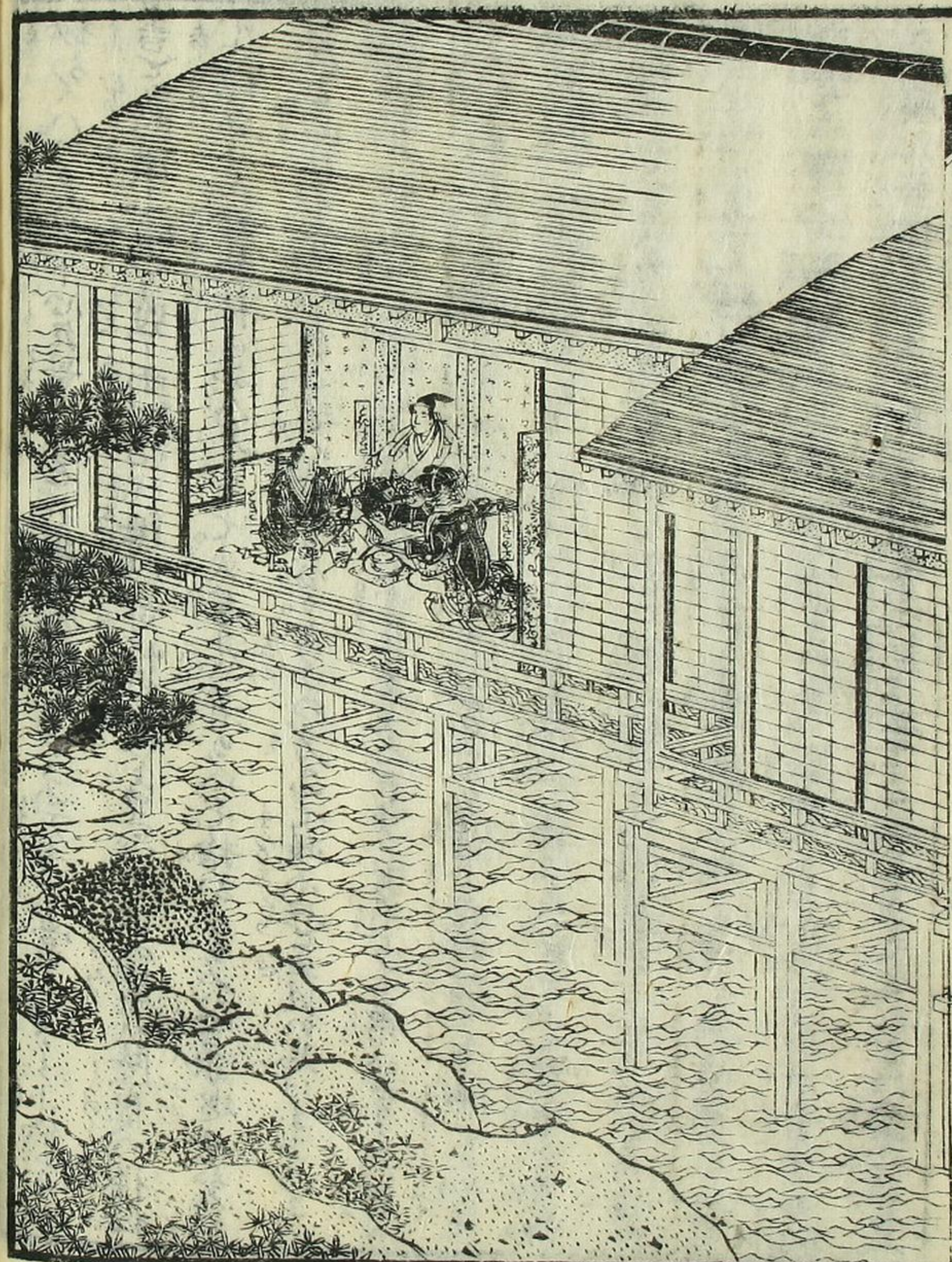
廣元善信と召ひしより命せ合めしは兩個のうて此をたのむるあり。あ
まご上と憚り執権の慮を以て口外せしり。今日命を僥倖し
如きも淀の執遠別れ一達けし。時政の勝てより善も思ひぬ義秀も。羽林
手自一口の太刀と褒称ありしを心不快くも今も莊園を充行んとす。い
嫉りくも人の眉を擧め君の命も憚りにあねどのも若年かす。ま
賞罰依怙の沙汰も多し。這回の一挙義秀が功ありといひ。取不足
草賊と五人三人伐りて。この誓とす。凡と莊園を充行し。故幕府の
おん時。功の浅深より定めらる賞罰。い。この國家の政行は。君の
旋る。貴を等より思惟あり。在下も猶再思と愚存と述べ。とあり。け。兩個
の案も相遠し。例の遠きが偏執と。い。け。執権の例と。い。術多。後の
評議と俟り。い。時政へ館へ帰す。室家牧の方及義時とをく招き。い。如何し

いぞ拒き余你達を異見せしめ欲と耳傾けて囑り寄せしむ牧の方の彼も敢て黒き齒莖
と見ゆれば若年といひある。羽林家のいと鈍き。尚小義秀小壺の淡く二隻の鱈
魚を捕へし。まゝの勇士と替る。平生を改めし。渠が所為の命をたたくと思ふ
よて這回のことの身の不測と顧みよ。かの返て改むる賢者の風も有難は心操
とひよりの義秀に賞しぬ。その所謂更なる奈何とひよる。假令その身を殺
ての君の罪と擯ふあり然る小義秀の勇と黠と自ら落す。あつて負ふと賊と
撃且擒して罪と訂せし。所為忠不似し。其の君とて暗愚の傍と四方流
とて忠厚と人の言ふ邪結ぶ。暗さる恥と明さる頭りし。その人として功ありし
所領財宝の賞と充てし。忠厚の武士あり何とて功と賞せん。三歳の小児も分
解め易き。加ふ所の賊は。修羅五郎が股肢めて幻術の書と
持てし。義秀奪ひし。其の書と速小將軍家へ呈せし。とて顔と

秘ひ。ひりあつ下心死量らむ。渠勇力あり。小方夫不當とせし。小尚を秘
書と熟讀し。雲と霞と招び隠形奇怪の術とせし。天下の累に陸奥の往任
小十倍あり。君執権のおん身とて。夫も小心者なり。捨てし。人寛小返る。か
らひと必ひて。然もど妾の浅なる。女子の才小て。政小。玉ひの必けと。小
と向せぬ。多々隨言と心隈あり。言はま。お用ありと用ひて。君が
心小仕せぬ。且義時と商議あり。針の糸と。當下義時膝と。母の仰至
極。在下と。差と。一伴和田の族も。奮功小。慕も。我言と。昔家と。茂如
小。然る小。義秀武勇あり。今も君の寵小。誇り。その威と。逞と。ま。の。頼て
天下の礼と。生せん。願つ。人。渠。鼻と。挫く。小。如と。時。政。莞。尔と。笑
你達。兩個り。為の。陳。平。子。房。の。人。と。の。如。此。あり。と。次。の。日。宮。中。出。仕
み。廣元善信等小。是と。修。且。羽林家へ。尼。中。臺。より。仰。あり。と。此。心。ゆ。人



父子夫婦閑室に
あつて和田一家の
威風隆さんとては



とうりつ兩個の老臣、之に性うぬ北條が討らひ、
 小言上のほるれ、言論方多く、快く口と喋む。折々言次の若侍國の彼方小千
 へは、御召小うて朝比奈万称、即ちさるれ、聞て時政肥て受直さぬ
 こゝへ喚出せど、以上間程なく朝夷三郎、衣紋製い立ど、廣元善信心ゆ
 這へ何更と見合ひのこ。時政扇と笏小採り、唯今義秀と召さる。各へいま
 告げ、老の鹿忽と思ひまんが。緯多心にそそのうと。告る小暇なき故あり今
 義秀小問とめて、其縁故と知る多くと。會釈返り、此方と向き、やれ義秀兼小
 這回天城の賊と撃。將軍家の御心と懸り奉る一段の、手柄も溜す、羽林家
 にも満足小思、召る所あり。然るに、你の砌、賊首鉄盾矢藤五、所持じ、
 幻術の書と取揚さるはと聞り、され速小將軍家へ、献ぶべき苦言と、今に於て其
 儀多く、且演説も及ぬ。秘かか書と奪ひゆき、術と字むん為す、君の御不審

深きふら、在下とて正さる。直さるその書と出ひ、お放る、今よを秘する罪責を
 らの時政、言、後、宥めらる方あり、如何小朝夷義秀と藤を、去りて若を
 向ふ、下義秀此百強が、いふ小其書、宣ふと、矢藤五と討、これ渠を懐、
 秘し、と在下、手自取揚て持帰せり、いふ、この始、経仕が、持、と、矢藤五が
 奪ひて逐電を、う、在下、の地、不在、の、聞、さ、の、い、や、と、幻術の書、を、と、扱、て
 見、小、隠、著、し、て、書記、せ、り、の、あ、ま、い、倉、卒、の、間、小、解、ま、さ、る、い、思、小、是、と、解、し、て、
 とも、国家、の、為、小、要、る、術、を、却、て、他、小、悪、逆、と、初、む、後、と、存、さ、る、時、且、と、過、こ、
 二、卷、と、も、讀、て、灰、然、と、す、畢、ぬ、勿、論、と、の、賢、慮、と、窺、ひ、計、ら、ん、と、存、さ、る、と、固、く、
 勿、の、書、と、分、捕、と、差、上、よ、の、命、り、の、以、誇、り、か、す、く、差、出、さ、る、鳥、濟、の、事、と、存、さ、る、其
 ち、焚、捨、て、い、る、の、と、詞、墨、ら、以、述、け、し、時、政、再、ひ、い、さ、る、要、時、の、と、際、が、か、く、
 執、権、の、威、を、た、小、似、さ、と、忽、地、小、呻、吟、る、其、少、虚、言、の、た、小、放、る、に、甘、る、就、度、の、受、え、ぬ、焚

捨すとのたまふ。後明とまきとも多し。雅ふくの虚実をわんいふ。又か実云ふ。其より
 澄文と献らる。上。倘捨拾と虚言て秘小藏。あくとあふ。其の固より三族もて去罪
 科と被らん。その赴きと書裁と。料紙硯と。寄其朝夷の前へ。居る義秀。現ひさ
 うせに仔細及ひいへ。と執権の指揮のまあ。証文と認めむ。以時政とて續下。秋
 二個の老及ふ。向ひ倅如せ。あふ。人。在下上。い言。あひん。足下。心ゆ。う。人。と席
 と。と。奥へ。う。ふ。朝夷。あ。及。暇賜へ。宿舟へ。販り。あ。う。と。父義盛と。兄常盛
 ふ。と。演説。あ。ふ。時政。あ。書。と。り。く。時。あ。望。密計の補。あ。さ。ん。を。巧。う。と。あ。その
 面持と。と。察。する。と。焚捨。う。と。い。ひ。紛。ら。望。の。あ。く。証文と。認め。あ。販。り。う。と。実。の
 かの書と。焚捨。固より。幻術の書。あ。なる。国家の巨害。あ。の。あ。う。都。て。その。妖魔と。解。の
 術。と。書。裁。され。の。倘。敵。有。て。あ。ゆ。と。施。け。の。あ。え。ん。を。ま。て。挫。の。二。助。あ。く。無。の。と。い。ふ。と。え
 か。び。因。て。深。く。秘。て。柵。下。惠。の。饋。と。え。て。老。て。養。ふ。ふ。う。の。以。盜。石。と。ま。焚。て。用。く。小。用

ふ下と。言。と。さん。聖賢の書。用。う。所。善。う。ま。の。悪。と。あ。邪。及。の。書。取。る。善。の。の。國家
 の。兼。あ。う。さん。や。是。の。の。言。い。ま。す。も。る。理。あ。り。と。邪。なる。書。と。惜。怪。く。の。証。文。と。献。上。
 在下。と。心。と。訝。あ。ん。れ。と。の。粹。決。と。言。い。の。と。と。て。義。盛。う。ち。点。頂。と。も。乃。理。の。う。く
 なる。彼。人。の。奸。佞。あ。る。以。後。猶。心。用。ふ。と。と。その。不。虞。と。て。甲。し。け。る。奥。小。尼。御。基。政。子。の
 方。羽。林。家。の。心。より。莊。園。二。所。と。義。秀。小。賜。う。ち。の。御。沙。汰。され。と。這。へ。決。て。思。ひ。も。た。ら。ん
 偏。小。依。怙。の。心。計。ら。ひ。思。ひ。ま。す。あ。ん。う。の。口。あ。ら。然。る。と。時。政。密。告。う。ち。の。尼。御。基
 点。ひ。ひ。の。小。集。小。莊。園。と。共。あ。る。や。の。功。の。及。ん。と。の。將軍。家。へ。妾。程。と。言。ひ。下。と
 羽。林。の。所。へ。余。あ。り。時。政。が。言。せ。陸。軍。と。それ。と。止。ち。う。あ。う。と。羽。林。も。適。う。う。言。乃。此。二
 者。あ。る。と。中。小。の。う。憤。あ。る。あ。の。う。母。公。の。令。せ。今。も。小。辞。む。き。小。け。され。の。程。と。く
 回。答。ま。う。させ。け。う。吾。天下。の。主。持。と。て。一。箇。所。の。莊。園。の。口。を。の。め。く。あ。う。の。と。巧。惜。と
 業。多。と。世。と。無。端。思。う。あ。程。日。来。う。者。あ。る。の。鞠。と。催。と。て。も。あ。く。持。と。く

過さぬと偏朝夷。莊園のこのく。廣幡の局と云ふ。容顏美靡のこ
 ろて声よく謡ひ舞とまひ。道の暗く。始めて宮中へ召され。二の夜。不
 愛ありて。冀翼連理と。か。ひ。ひ。明暮傍と離れ。漢帝の李夫人。唐帝の楊貴妃
 が。龍も。肩の。き。情と連ひ。ひ。小。頃。聊の。芳。竟。小。重。り。て。空。煙の。む。さ
 ま。の。世。下。公。公。羽林家。只。管。悲。し。哀。傷。を。な。る。ほど。も。會。者。定。離。の。あ。ら
 詮。方。の。殿。と。魂。の。土。封。じ。ぬ。か。と。小。羽林家。の。夜。と。の。昼。と。の。さ。り。侍。と。衣
 慕。ひ。て。物。狂。り。と。よ。よ。よ。細。王。復。食。さ。る。小。安。ん。ぬ。は。斯。て。心。の。結。ん。だ。病
 の。出。り。や。せん。と。例。の。中。野。以下。晚。近。の。面。只。管。ゆ。と。慰。む。れ。と。慰。め。ら。れ。と。諸。俱。不。晴。ま
 時。る。折。々。と。ま。ま。羽林。の。いと。世。間。と。要。る。な。ぬ。お。思。ふ。是。と。の。も。北。條。一。家。推。成。小。誇
 は。故。あり。思。召。者。と。よ。よ。よ。と。今。速。也。如何。と。も。主。と。争。う。る。心。傾。へ。日。小。割。也
 積。り。勝。る。二。夜。の。宵。は。伽。の。甲。し。うち。集。會。何。か。の。ゆ。え。と。慰。め。んと。在。と。無。工。と。り。小

弟で出てうち笑ひ。真の奥も。ま。ま。中。小。流。谷。小。五。郎。時。氏。が。扇。と。把。て。掌。と。撥。と。お
 當。り。初。旬。雀。の。雲。の。神。率。の。折。在。下。適。敷。と。い。ふ。六。その。行。装。と。視。め。り。の。と。編。笠
 小。面。と。掩。僕。人。と。お。て。彼。処。へ。と。入。り。又。又。その。中。へ。交。り。て。是。を。見。物。と。す。然。る。小。在
 下。と。肩。と。並。肘。摺。あ。へ。見。物。と。す。女子。の。顔。の。薄。練。の。被。小。定。う。る。な。ど。も。南。麩。の。葉
 と。顔。郁。と。す。え。の。ぬ。心。地。せ。る。小。猶。面。影。の。床。あ。り。て。立。花。む。ん。と。傍。侍。小。あ。へ。ま。ま。の
 後。へ。回。り。て。よ。よ。よ。も。明。地。の。り。侍。女。婢。女。と。従。者。四。五。個。在。下。と。挙。動。と。い。と。怪。る。あ。ら
 けん。婦。人。小。何。や。ん。低。語。て。是。と。早。も。彼。方。を。在。下。の。ま。ま。執。念。く。り。と。の。ま。ま。笑。ひ。ん
 と。後。方。小。着。て。の。湯。小。淵。と。喚。来。る。漢。月。小。被。内。下。と。候。小。船。と。思。ふ。と。来。り。笑。作。天。使。の
 かん。花。洛。堀。河。白。柏。子。の。母。鶴。あ。ら。ま。何。ゆ。え。の。地。下。へ。来。り。誰。か。を。寄。り。て。倚。る。
 と。不。審。之。の。母。鶴。も。ち。微笑。て。此。方。来。り。妻。の。地。へ。来。り。ゆ。え。は。名。の。折。と。兼。か。と。今。の
 主。あ。ら。の。上。へ。訪。来。ら。せ。ん。ゆ。え。得。る。と。い。ふ。意。外。の。疎。遠。ふ。り。な。る。と。君。の。恙

ようと記し彼父母の許より送てる事不悔情伴在洛より将て来ぬ心利き下
 僕もまゝの心ゆゑに母の許より打扮せ安達一景盛が甘徳の宿所へそのきけ
 と徳もかの下僕の兎角まで安達が郎の奥に小利かの文と牛執次の婢女小はじ
 けと直小笹鶴が子舎小持たせとありとて出ひかへん笹鶴の堀河より表書と記
 把る半の遅りと封しきりて裡とて言ひ言ひとて谷小五郎晴氏が副書とて名くも
 羽林家の心と籠まをひつゝ文のえんを認りし胸も書きとてその文作らるも
 びのせせりと思ひはる太息の物なり然とて封し切らるるも其の成
 と西辺の心つゞと始め終つて讀下は小筆の跡がみれば見ぬ恋も浮若てそ
 の空の涙めやう心地死なぐ確迷ふ恋の山路の草の露やあはれ袖袂絞る斗
 下の憂又思ひ心るは身も然管小あひとて言ひ給へり書書はひさし是が実情のこ
 ば勿辨めはるを嬉しむ身もい餘りて今の方へ己がうらもあはれ鹿丈のまゝ人と如何
 せんともいふ浅増さ小筆採るも又悩みの運びり自在あるごとくかくて其の事
 小もあはれと作らぬ心とあるは方さうの消息恐るも嬉しきとて如く牙小
 をあまひ何と回答と羊躰つらと推しめしと書きてめて晴氏の名死ふとて封ト
 籠押女とて使へりといふか下僕に地原で主人ふかくと告げまはる晴氏らてかひ
 き熟と視ては頼頼て羽林の屋前出その文又も携えん初のとて返して裁とを
 木の文作は推量る小心の君小修とて景盛初てあるとて果敢とて其の回答
 り兼るうの底意らるえ然とてね田の消息あはれ小偏小正記計案
 と廻らるるひさしとて言ひせし頼家するも彼書とてあがて祝ふ小走り書の
 艶羨さる春の花の風小飛び妹の竹家の文あはれいとあや小書做しとてその文作
 又拙るるひさしと祝波とて言ひ其人の床をて胸又痛る心地とていふ何れも
 志と景盛と遠ざらんとて計らひらる夫常言のいふとあり同来らるるは樹もらと

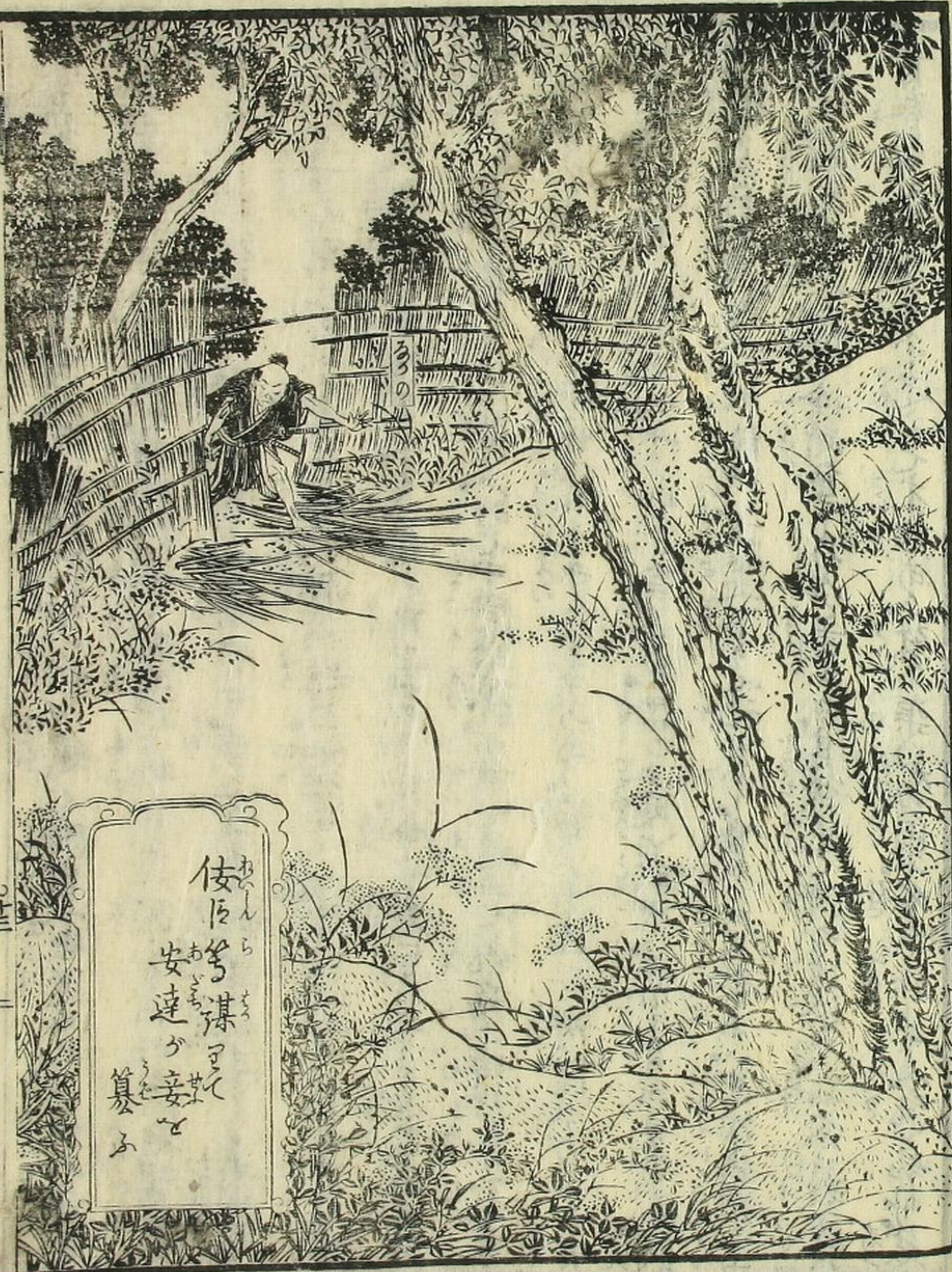
ようと記し彼父母の許より送てる事不悔情伴在洛より将て来ぬ心利き下
 僕もまゝの心ゆゑに母の許より打扮せ安達一景盛が甘徳の宿所へそのきけ
 と徳もかの下僕の兎角まで安達が郎の奥に小利かの文と牛執次の婢女小はじ
 けと直小笹鶴が子舎小持たせとありとて出ひかへん笹鶴の堀河より表書と記
 把る半の遅りと封しきりて裡とて言ひ言ひとて谷小五郎晴氏が副書とて名くも
 羽林家の心と籠まをひつゝ文のえんを認りし胸も書きとてその文作らるも
 びのせせりと思ひはる太息の物なり然とて封し切らるるも其の成
 と西辺の心つゞと始め終つて讀下は小筆の跡がみれば見ぬ恋も浮若てそ
 の空の涙めやう心地死なぐ確迷ふ恋の山路の草の露やあはれ袖袂絞る斗
 下の憂又思ひ心るは身も然管小あひとて言ひ給へり書書はひさし是が実情のこ
 ば勿辨めはるを嬉しむ身もい餘りて今の方へ己がうらもあはれ鹿丈のまゝ人と如何
 せんともいふ浅増さ小筆採るも又悩みの運びり自在あるごとくかくて其の事
 小もあはれと作らぬ心とあるは方さうの消息恐るも嬉しきとて如く牙小
 をあまひ何と回答と羊躰つらと推しめしと書きてめて晴氏の名死ふとて封ト
 籠押女とて使へりといふか下僕に地原で主人ふかくと告げまはる晴氏らてかひ
 き熟と視ては頼頼て羽林の屋前出その文又も携えん初のとて返して裁とを
 木の文作は推量る小心の君小修とて景盛初てあるとて果敢とて其の回答
 り兼るうの底意らるえ然とてね田の消息あはれ小偏小正記計案
 と廻らるるひさしとて言ひせし頼家するも彼書とてあがて祝ふ小走り書の
 艶羨さる春の花の風小飛び妹の竹家の文あはれいとあや小書做しとてその文作
 又拙るるひさしと祝波とて言ひ其人の床をて胸又痛る心地とていふ何れも
 志と景盛と遠ざらんとて計らひらる夫常言のいふとあり同来らるるは樹もらと

舟押さる水濁らひ晴氏君の志小懐らん道あるぬ正以初めまぬ
不善と練むることあり悪を醸て國家を亂すは尚ほ思ふべし
忍ぶべし

續輯第二 勇士惜壁妾別 柳宮恋情曲道

再説羽林頼家々如何の一日の早くかの美女と初るるのこころ
あともいまだ然るべき便り得ば除るること堪兼ひて中野五郎の密を
その計策と譚らひあふ渠の固より好侍して生憎のりある君の傍小膝と進め侍
侍今朝覚るあり頼て老臣等とあり君へ認まらずさふ當下箇様の廢命あふ
安達景盛と違はれと更仔細いす如きて渠が居るる猶在下等力
あとの美女が伴いと籠中のあはれ扱じういと易くいと侍るるげふ言するあ頼

家荒示と笑ひのひ今始めなれ即智なく感する所あり頼と新後
あはれ侍居る波谷晴氏小膝と進めて言すこと究めて良計あり然れども
よふ一箇心小掛るるのい開り彼朝夷秀秀あり渠近習の列小あて在下等向僚
あきと知右如く年小似けるは強者ああるまは左様の企あてと倚か
賢者つて君小練めも奉るくま吾們と誠む下さ中と小面倒る人景盛
の他小義秀も退けまをの粹就とあて中野能成といふ心の着れり渠
聊とああ時この計策行いさひ如何と退けんや良案の思案あある一人
あしとち点改よれたるのひあり君の知召さて先頭陸奥岩城の郡小山論の
とありて百姓們黨を結び脱小乱逆小あせと地頭を漸く制止めまの激動の
まうと裁断のとあはれ小あ然るべき使とまらして檢断裁許するさ
と然るまの命と被り人とあまの義秀の勇略のこる替弄推歩の形



安達の妻
 安達の妻
 安達の妻
 安達の妻



去るや

去るや

去るや

又も習ひ浮べてありとの人其検断と渠の命ト遠く陸奥へ送送ゆの内外の坊は事
 ざらへる候ゆと言まほぞ羽林熟聞右渠を退るゆの旨くもあれその近習者
 任小使の賦税の正公掌る者ありて曲くそのこと執権へ送ることも无益
 下他小使とて入るよと命不能成膝成進め如何し渠が仕ゆのあねと君との
 命あるへ執権も手拒まんまう免小角小あう以今せ出さと果しと言ふはれ
 頼家の言葉よと後ひのゆり中野能成の小前と退出て執権の詰所をくわ
 小使の男とて候ひ吾内執権一言し余らすゆのあり昔りくはの所へ入る言
 せとのべかの男は侍人如此のやう言ひお君の口從と取次ハ常々うのうあり時
 改の應と回答を被然ゆは能成未坐下りて礼とせし准今君の命あり先頃岩城の山
 論にて然るべき人と擇み検断をせんと言ふ其後從て何の沙汰も必承義秀
 青春るとと方子不達とて才智あり殊不渠ハかの国不々々住して人知れ然

といこの回の検断ハ渠小倍とありとあるこの後執権まじり込ト異議あり思ひ
 義秀の命と頼と出せんとあはれぬに在下是と兼りある賦税小拘り
 徒の仕あると義秀の命せしむる何あんと存むとと君の殊小義秀と
 愛をせととの除り猶功とせとせと在園の一所も二所も宛行のれん心
 と推しよけしと強ふは汝め奉らば執権の言し述て賢急小任をぬくと
 時政速の回答もるさ及眉と頼めと案の考へありけるが忽地小掌と徹とらかの
 山論の記とて尋常の事あり陸奥の賊將経任が押領と在る破口ハて
 後その地所とて先主へ返さる元来遠境のゆあり其人乳も穢りて後弱
 さい採むるゆとふと強動とあり然も検断の使さりの分量ありあり
 之の地利美州と精をまる者ありての怖ひがた然も賦税と堂と其の長
 さいの生憎も勇気ありまると家ありの美勘の精が故も用と擇

こと延引ふ及ぶの処を待た居るも居たり。義秀の思一カロハ心着る所を老
 臣等と商議する其教不討らるべしと之能成候御ありぬと心裡不欺び別とて突
 入らる程もあせむ時政治め廣元善信等二谷小居の拜謁が小居ぞ羽林家
 則出御あま各席といふ事と三河の国より早馬来り注進の教をいふ去ぬる月より
 當所所と不群益起す良民と害に守護人地匹等人数と集めことと平げんと
 致せむと賊徒才不勢加り。礼妨殆言語不ばえら。何平然と軍將と下れ
 早く平治をせむめば無越はたふふいと訴へてかある。誰ぞ付手の將とて彼地
 へ向いせむと言ひけむ頼家の後中野能成言ひて其爰ありと左右の袖を
 合せと人数の多くも野伏活無の所あり。何条の有りたれ早く討手と四
 小あり。其討手將とるりの安達景盛の仕あり。如何とあま三河の渠が莊園と
 君頼と渠の命とて一命不周人老の若の理あり。即安達景盛とる

事と傳え。唯今仕ある。使と下さ。當時政君不討陸奥岩城の山論
 のあいま然る人なり。檢断遅引お及び君の義秀より其仕不宛の
 中野能成より兼り則老臣も評議あり。義秀と究めて願
 りの順序義秀と召せしと命のあり有難く候。頼家点以ひ
 汝等善ととぞ。分換けんと仔細あり。頼と唯と宣へば未とて義秀成伴ひ
 未も斯く頼家右のより自ら命のあふ朝夷義秀の兼り。命と辞むふ候。在
 下不才の身と以て山論の檢断此彼と決言えと。思ひ候。這へ思慮
 深く美勅の困る人の仕あり。是後争克すと。いせも敢て北條時政時と
 ぐやこれ義秀汝遠路の勞に厭ひ卑下を免さんと為りの死を視ると。親み如
 きを。其は彼に従ふ人。汝をまよふ才あま。斯列席と命せ。夫と辞むも

怨を族ふはらひしるも深くも苦しむ遅くも三月速く二月をうら飯をまじり
 市中成長て武辺のことをもぬまう然る法増さすものあり元来軍陣におも
 女と伴の制禁あり殊もその隊の天将とて争ふ禁め火犯さるる吾とて此月
 日睦に借らん情のたはれ防の忘るるわが別るるの心憂けとて君の命と
 何ふせん後らうあまの長くも安んずる月日あり妻時を忍びておれと説
 示さるる世態の軍の捉敵を伴と下とあり給方あり然る人への勢ふさげ治業
 のゆゑ木曾殿へ鞘繪の青と陣中へ伴のひめをとりあはさるる開の心およう思の
 ぬりてまきのこと論入へまきぬね強を頼ひけねと不測の縁小撃うまて
 産の奴え京師へ送一遙下る五妻路やよの鎌倉へ来り一由君が情お絆さる
 且暮冊をまきする娘とて使あるか今まに別とまわむとて生れ死もあ
 まらば手狭く怖くも故に對ひあひや情のわんが不測のありとて生れ死もあ

と猶平伏して泣くことう海勇士と名おつ景盛の事とて思志の情弱る村
 張中心弱く怒りて眼の涙を拂ひ或ひ威し或ひ謙し欺をあると
 りある後へ吉辰と擇ひ勢おひて頼て後念をもちまき某生再説朝夷の
 まよりお宿所へ飯を父義盛及び兄常盛もふ今日ぬ此の命あり身お應せ
 こある一回辞退のせうと執権曾て許さぬに畏して退出しう因く厚く被地て休
 出さんと存せりあう。旅の調度も合期せぬに家お在合の東西とてさへ
 とのへ義盛点取て頼て莞尔とち笑ひ這へ你等の若輩の命今まにさるる
 執権密に君を勧め表おのゆるて重く用おる容おる存その内心に七八は後
 す下。度下をさして越度おん吾も威が削らんとす奸婦より出さるる然る
 今更辞む小術の心を責て勢む下と縁にお義秀願着る今畏いひに位位
 ぬ人三草太郎五と義法不通一う城戸四郎の縁と若らる兩個と伴のひめ

近くとも出て眺をありけりが故に其処の庭下法履を被り世方の蹴踏逐て世鶴
 が侍女と号し女二個あり侍と云ふあり一が号を禍ひの起るを爲めあえ
 るのゆゑ二個の属副を以て世鶴の今こそあまごん白拍子の流と申す初
 人の居らぬと云ふ是甘し心地の月のまゝに葉子の被方の隈まで目を赤ら
 ぬと云ふは捷達の義陸と云く掬ひて頭のまゝ出さる大漢士飛かつて世鶴
 と執りてさる獨ふまゝと合せ猿書其手と返して小腰を抱えまゝの教と極分
 てかたくとをりの世鶴の作天の取て兎角のゆゑも言へばまゝ心地のま
 せぬ思ふ感ひて人の戦慄と叫んまゝと声のまゝは是れ地獄の罪人がか
 らぬ思ふまゝと火の車から我せまゝ心地のまゝと思ふまゝかて大漢士は
 の不と五七町まで来まゝ傍へ相圖や定めひん傍るまゝ路より女家物と昇持せ
 武士雜人うち父を二十人計に出来まゝと云ふより家物と傍ふ下り波谷氏

ぬと言ふはぬの癖者の頭を懼し衣を把りやと世鶴は其如く下り手甲を合せ
 猿書と極と云ふ言ひや吾の波谷晴氏ありは傾君の消息を尋ねてわがわ
 け薄より吾が方へ一枚の返り紙を寄し其意を申す君のまゝと云ふは君を分
 け浮きぬと云ふ吾はは痛くわがわのうら景盛とのまゝありたて手折ぬす
 めく其便宜と後うちこの這田景盛法監と進討してうち中の君の哀路の恨み符
 吾との傾君と場へ今宵因らば折と云ふは三三三住ひり定めぬ和の舟の涙と云
 ぬと云ふはあつた高みかゝる淋きかゝる子の物と思ひる并ひりかゝる君とあ
 るすかゝる推量をは懸せよ然と云ふ見より上もあらぬ常中へ伴ひて君の見
 参ふ人こそ
 お如心海なる余物へ教書と云ふは律律と落めぬ世鶴の月の明か瞳と云ふは
 見まんぞとの波谷小五郎のひきよひと胸の落るものこそ是より赤心
 護身糸を左右の身も動まぬ月の光や小兎をゆきまゝ昇齋せよ家物の十とて金

銀の時繪あり金物繁く打つる月映ど怕明らう。いふの是れ宮中のは御寮の
 疑ひの然ままに淡谷がら如く教のあはれ事々々ゆるべきあけあはれ
 行狀とも口口とあるは志のあはれ事々々ゆるべきあけあはれ
 小限やあはれ物思と稟あはれ。わ粹むおあはれ。今宮中へ参りあはれ。道の
 らは心何のせん心ふ定めらるる儂とあはれ。在るは五郎侍へ跪まり。和
 は青女達一軒の情と立て心程吠かぬと見受らる。然とて大功の細程と願うの本支の
 てふと捨て大と取る実一世の冥加あはれ。感ひとて侍侍のあはれ。禍ひとて
 緯よりあはれ。景成無が牙の保も大なるあはれ。思ひ返して是れあはれ。糸師
 の白拍子。君願のあはれ。けの向の岸あはれ。かの洋の舟一舟のあはれ。近曾安達
 が館のあはれ。本妻あはれ。び不貞と彼とてあはれ。あはれ。あはれ。あはれ。
 如きの心狭く物須ふ心ゆるし相とあはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。

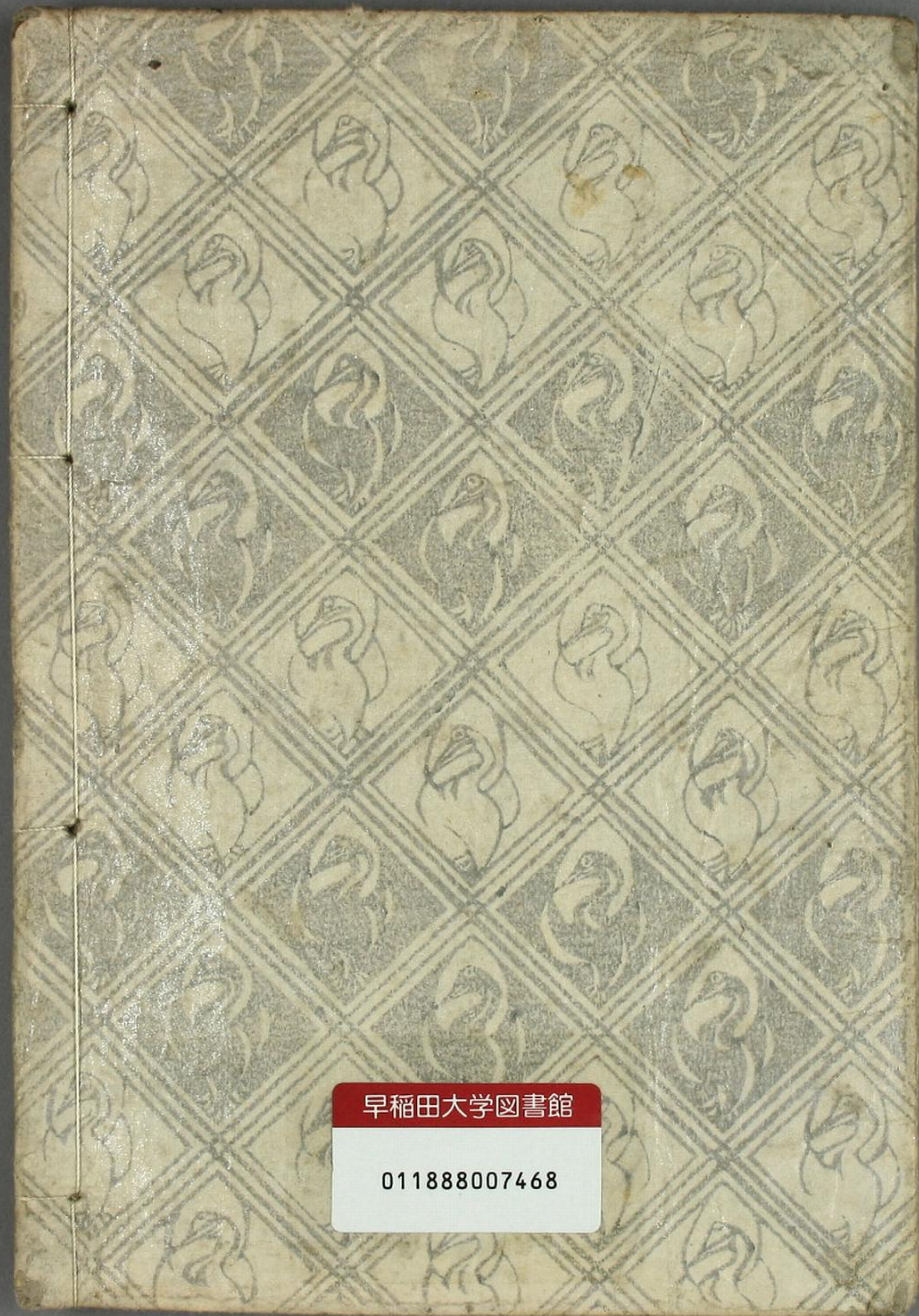
同々推入る。世鶴心の決せむ。こゝろをゆるし。けの向の岸あはれ。開が侍明や侍るは
 夫庭ふ其処へ抱き入を侍と飛と地とあはれ。女達も彼あはれ。侍女も周章とあはれ
 と世鶴が在家と探せど教のあはれ。命と早も惑ひ。其由彼と守る甲乙へあはれ
 て猶遠近と尋ねらる。かゝるあはれ。逸早くも羽林のあはれ。達し。程多し。渋谷山野
 等がその女子とあはれ。あはれ。注進あはれ。頼家の悦びあはれ。あはれ。あはれ。
 内美藤多の一間と暴お掻拂を金襴額瀨の衣裳とあはれ。朝夕の酒度あはれ
 まる。金銀と漆と結構善美と尽く。実あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。
 品とまを何とてあはれ。取柄あはれ。冊子の女子と心利を婢女と西三個とあはれ。今
 や遅しと侍儲の時め人の花瓶と送らる。異あはれ。以てあはれ。あはれ。あはれ。あはれ。
 て女が素性とあはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。
 念と断るの言里貫とあはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。あはれ。

いと花やまのちもふとを新て晴氏能成等かの乗物と急ぐて故て奥の殿へ昇念
 こせ此処まで動静と窺ふお此のちまうとばけとべ則老女対面あり乗物のまはと通
 ちて雜人們の旁に己が袴所へ入りたる老女の故に乗物の戸を引開て簀薨が途方ふ
 暮るる景勢あり成りけり仕け湯をどと見え輝いた方迄有性より波のへて赤知
 ららん此処をて羽林家の所ぞう。既おん方と住すたる局の筒より余およりよく補
 理て召仕ふ女ふぶの長ああり怒りありと彼老女のてけりて対面とせりてあて彼女ふぶの
 心どけり二個ふ名湯と一則局へ伴るふふその流らるる言語お然とわりの能きあぬ
 ちりりかて女ふぶの世物と湯殿へ伴るふ湯と流させ後へ彼の晴衣とてあは後
 ちまかま粧ひとて此方へと筒の局へ誘ひて純子の袴を居らつめと高杯お
 盛て出れ菓子とて同あてお物ぞう。簀薨の夏のちもに猶愛入る心地へその
 善悪とて入舞へば霎時ありては向の老女が今も有り流りて未あひる討心とふいと

白拍子と数々召しては酒宴あり休息あは其席へ案内して参るべし居にゆ
 筒より後せぬとのふ周て簀薨の覺來るも身を起せば老女の先へ湧こまて
 いとも遙けた廻廊と彼方せ方とはせんとおむく廣らるる所をふ実や金燭銀
 燭の重なり明くま連ね白拍子とてお教ま集余とてさあくの舞曲とるはその正面あり
 君とあやしく曲舞小伎副のひ教まの美女小酌とてさうと舞と視て奥へあかて老
 女の世物とてかん前近く進ませつ今宵はさせめひつる簀薨お情多きりて會秋とて
 まは頼家の見とてよく祝のふ現不晴氏と言葉お差かして天然の容色の天津女
 が影向さるるもの。さあかのあはるる勝へて秦の阿房おあはるるまは三千の美女とておはる
 吾傍とてや仕ふ女ふの逸々容貌の勝るもの。置とてさあかの簀薨お疑ふては
 敵とる老まうと心中十二分お秋ひひひとて世物お下さるあぞ世物お疑ふては
 さあかの命ありとも義とてさあかの是非お許と原いんと思ひしら不束とてこの身を

其不愛^め交^あの^ひ実^み不^ふ勿^ぶ体^{てい}の^り死^し所^{しよ}為^なる^をと。その心^{こころ}不^ふ恃^ちも。不^ふ益^{えき}の^り罪^{つみ}深^{ふか}く^り。結^{むす}
 谷^やぬ^が言^{こと}葉^たの^り安^あ達^だの^り刀^た称^{せう}の^り心^{こころ}室^{むろ}の^り殊^{こと}不^ふ彼^か人^{ひと}ま^り主^ま君^{きみ}と^り作^{つく}心^{こころ}所^{しよ}を
 の^り斯^くま^り小^こ厚^{こう}と^り心^{こころ}と^り如^{ごと}何^{なに}の^りせん^と忽^{たち}地^{まち}心^{こころ}と^り翻^{ひる}して^り益^{えき}と^り賜^{たま}り^りと^り入^{いれ}り^りと^り不^ふ
 竹^{たけ}り^り種^{たね}の^り與^よと^り副^ふり^りと^り羽^う林^{りん}の^りこ^りと^り考^か思^しら^りと^り片^{かた}の^り心^{こころ}の^り傍^{かた}と^り
 離^{はな}り^りの^り龍^{りゆう}愛^{あい}日^{にち}と^り泳^{えい}増^{ぞう}り^りか^りの^り唐^{たう}朝^{てう}の^りの^り揚^{やう}家^かの^り女^{にょ}兒^に宮^{みや}入^{いれ}り^りと^り六^む
 宮^{みや}の^り粉^{こな}黛^{たい}顔^{がん}色^{しき}と^り白^{しろ}梁^{りやう}天^{てん}賦^ふと^り今^{いま}思^しひ^り遠^{とほ}ま^りと^り

朝夷巡島記全傳第七編卷之一 畢
あさひのまがらみとうしせんぜん



早稲田大学図書館

011888007468